

■プレゼンテーション 8■

哲学対話と知識教育との接続に向けて—媒介教材を用いた授業の検討—

キーワード：哲学教育、哲学対話

村瀬 智之

本プレゼンテーションで参加者とともに議論したいのは、哲学や倫理学上の知識教育と哲学対話を学校の授業においてどのようにすればうまく接続できるのか、という問題である。ここで「知識教育」という語で念頭においているのは、たとえば、高等学校の「公民科・倫理」で扱われるような哲学・倫理学的な知識の伝授を行なう授業のことである。

哲学対話が、学習者にとって教室において深く考える経験を提供し、知識を教員側が伝授するだけの授業にはない魅力や効果をもたらすことは、多くの教員・学生・生徒が認めるところであろう。しかし、一方では、哲学対話を既存の教科や授業の中に組み入れることの困難さを口にする実践者は多い。そのため、哲学対話とそれまでの授業を別個のものと考え、切り離して行ったり、哲学対話用の特別な授業枠を用いたりすることもある。

私自身も教員として哲学対話を授業に取り入れているが、評価の問題もあり、一定の知識教育も行っている。内容も形態も異なる、この二つの授業のあり方をうまく接続させることができれば、哲学対話も知識教育もこれまで以上に効果的なものになると期待できるだろう。

本プレゼンテーションでは、この二つのタイプの授業をつなげるためにある種の教材（「媒介教材」と呼ぶ）を用いる授業実践を提示し、このような媒介教材を用いた授業方法の可能性について検討したい。

（むらせ・ともゆき）

東京工業高等専門学校一般教育科 准教授。千葉大学大学院人文社会科学科博士課程修了。博士（文学）。2008年度より中学校にて2011年度より高等学校、高等専門学校にて哲学・倫理学の授業を担当。共著に『子どもの哲学』、分担執筆に『こころのナゾとき』、『哲学トレーニング』（近刊）、共訳書にシャロン・ケイ&ポール・トムソン著『中学生からの対話する哲学教室』、マシュー・リップマン著『探求の共同体 考えるための教室』等がある。